

9月3日 年間第22主日

申 4:1～8 ヤコ 1:17～27 マコ 7:1～23

1. マコ

イエスとそれに続く初代教会の時代のユダヤ教は、律法学者による聖書解釈が大きな権威をもって人々の思考と行動を支配する世界でした。「昔の人の言い伝え」(v.3, v.5)と呼ばれているのは、そのようなユダヤ教の教えのことです。この“言い伝え(パラドシス)”を固く守ること(v.8)は、敬虔なユダヤ人の標語でありました。それは今日のカトリック信者が、“教会の教えを固く守る”という標語を、その信念として主張するのとどこか似ているように思えます。当時のユダヤ教では、律法学者による解釈が聖書と並んで、または聖書を超えさえして、人々の思考と行動を支配していました。これも、現代の多くのカトリック信者に共通する基本姿勢に似ていると言えそうです。

初代教会は、その宣教と共におられる主キリスト(マタ 28:20)を引き合いに出して、ユダヤ教の律法学者による解釈を「人間の言い伝え」(v.8)として拒否しました。そして、それに代えて教会は、使徒たちによるキリストの福音の“言い伝え(パラドシス)”を宣教したという事実に注目しなければなりません。

使徒たちは、復活のキリストから権能を与えられた“わたしの証人”(使 1:8)として、例外的な権威を認められた人々でありました。なぜなら、使徒たちが宣教する“言い伝え(パラドシス)”の真の担い手は、天上のキリスト御自身であり、そしてそのキリストが“言い伝え(パラドシス)”の創始者また完成者(ヘブ 12:2)だからです。その内容は、キリストの福音の要約(ケリュグマ)と倫理的諸規定、およびイエスの言葉や生涯に関する報告などから成っていました。代々の教会は聖伝と聖書を通してこれを聞いて来ました。

2. ヤコ

v.21 「御言葉を受け入れなさい。」 v.22 「御言葉を行う人になりなさい。」

「御言葉」とここで呼ばれているものも、「伝えられた教え」(ロマ 6:17)「受けたこと」(フィリ 4:9、1 コリ 15:1)「受けた教え」(II テサ 3:6) などと同じ、使徒たちによるキリストの福音の“言い伝え(パラドシス)”のことであって、それによって教会は神の国を受け継ぐ民としての希望を与えられました。

使徒パウロは、福音を告げ知らせる目的を説明して、「何とかして何人かでも救うためです」と言っています(1 コリ 9:22)。「御言葉を行う」とは、そういうことなのです。教会の仲間である「孤児ややもめ」(v.27)の世話をする目的は、このような弱者も“共に福音に与る”ためでありました。

パレスチナのハマスも、レバノンのヒズボラも、彼らが貧困層や難民への慈善や教育事業などに尽力しているのは、民衆をその仲間に取り入れるためであって、その背後には中東における帝国支配の夢を追うイランが存在することも明白です。その熱烈なイスラム主義への固執は、このイランの野望と明らかに結びついているのです。

今日カトリック教会が行うささやかな活動は、それが社会活動であれ、政治活動であれ、その他のどんな活動であっても、このような明確な目的を持って行われているでしょうか。かつての西欧の教会によって行われた海外伝道に対する反動として、近年のキリスト教は“共に福音に与るため”という、使徒たちによる“言い伝え(パラドシス)”の本質的な部分を見失ってしまったのでした。その結果、福音の“言い伝え(パラドシス)”の創始者また完成者であるキリストが、信者たちの目から隠されているのです。

3. 申

v.2 「あなたたちは私が命じる言葉に何一つ加えることも、減らすこともしてはならない。」

カトリック教会の信者が、聖伝と聖書によってキリストの福音の“言い伝え(パラドシス)”を聞くことに、再び目覚めなければなりません。“カトリック教会の教えを守る”とは、それによって使徒たちが伝えた福音の“言い伝え(パラドシス)”を聞くためであると知りましょう。“カトリック教会の教え”は、決してキリストの福音に“何一つ加えることも、減らすこともしない”からです(神の啓示に関する教義憲章 10 参照)。

聖伝を学ぶことはだれにでも許されていて、各種信条、ミサ典礼書や各種儀式書、それを解説する公文書類は、その気になればみな簡単に入手可能です。また翻訳聖書は、非常に優れた“新共同訳聖書”が刊行されていて、ラテン語やギリシア語を全く知らなくても、美しい日本語で読むことが出来ます。

v.8 「わたしが今日あなたたちに授けるこのすべての律法のように、正しい掟と法を持つ大いなる国民がどこにいるだろうか。」

現代のすべてのキリスト信者に提供されている“神のことばの食卓の富”に私たちが豊かに与ることを、福音の“言い伝え(パラドシス)”の真の担い手である天上のキリストは期待しておられます。

ハレルヤ、アーメン。

9月10日 年間第23主日

イザ 35:4～7a ヤコ 2:1～5 マコ 7:31～37

1. マコ

v.37 「この方のなさったことはすべて、素晴らしい。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるようにしてください。」

このイザヤ 35:5-6 からの引用句は、マタ 11:5(ルカ 7:22)にも用いられており、そこでは イザ 61:1 からの“貧しい人”が加えられています。主イエスが“耳の聞こえない人”“貧しい人”に福音を聞かせ、“口の利けない人”に賛美を授けてくださったという、初代教会の生々しい信仰体験を伝えることが、それらの物語りの元来の目的であったと思われます。その際に私たちが理解しなければならないのは、“私たちは皆、キリストに出会う以前は耳の聞こえない者、口の利けない者であった”という、この物語りの伝達者たちの信仰です。

しかし現代人の多くは福音から一步身を引いて、自らは健常者の立場に立って、他人である障害者の癒しの物語りとして読むのが常でした。信仰の世界では、自分は目が見える、自分は耳が聞こえると考えていることが、キリストの福音を聞く最大の妨げとなります。復活されたキリストはラオディキアの教会に向かって語っておられます。「あなたは、……自分が貧しい者、目の見えない者……であることが分かっていない。見えるようになるために、目に塗る薬を買うがよい」(黙 3:17-18)と。

2. イザ

このテキストは、29:18-19 と共に、象徴的な救いの到来の日の預言ですが、その前提となっていたイザヤの“現状理解”を見落とすと、ただのおとぎ話になってしまいます。それは、“現状のイスラエルは神のこゝろを聞いていない”ということでした(29:10-12)。神の民イスラエルが、目の見えない者、耳の聞こえない者になっているという悲惨を、現実の罪の姿として承認した預言者イザヤが、ヤーウエによる将来の救いを語るのにこのような象徴的表現を用いたのでした。

v.5-6 「そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く。…… 口の利けなかった人が喜び歌う。」

このイザヤの言葉を、イエス・キリストによる自分たち自身の救いを預言したものとして、体験的に理解したのが、初代教会の信仰でありました。ですから教会は、「かつては神の民ではなかったが、今は神の民であり、憐れみを受けなかったが、今は憐れみを受けている」(1ペト 2:10)と、喜び歌いました。

3. ヤコ

既に久しく、我が国のカトリック教会の主日のミサの出席者の服装は、いわゆるカジュアルなものが普通

になっているようです。“立派な身なりの人”はミサにふさわしくないとも主張しているかのように見えます。でも殆どの出席者は実際には、決してビジネススーツを着たり、おしゃれ着を身につけることが出来ない程の“貧しい人”ではありません。事実、結婚式や葬式ときには、皆さん例外なく正装なさるのです。ですから、主日のミサの出席者たちのカジュアルな服装は、“自分たちは貧しい人の側に立っている”というジェスチャーなのかも知れません。

v.5 「神は世の貧しい人たちをあえて選んで、信仰に富ませ、御自身を愛する者に約束された国を、受け継ぐ者となさったではありませんか。」

聖書で“貧しい人”とは、“神の助けなしには生きて行けない人”、“神のことばを待ち望む人”、つまり“心の貧しい人(マタ5:3)”を指して用いられています。それは“敬虔な人”、“信仰に富んだ人”という意味であって、決して“自分たちは貧しい人の側に立っている”というジェスチャーのことではありません。私たちは皆、神のことばを、キリストの福音を必要としているのです。一人一人の信者が“自分で聞いて、信じる”(ヨハ4:42 参照)ことが大切です。

教会によって、使徒継承により受け継がれて来た“神のことばの食卓の豊かな富”に、信者一人一人が与ることを切に望んでおられる天上のキリストの呼びかけが、今朝の日課を通して全世界のミサで語られています。「そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く。……口の利けなかった人が喜び歌う」というイザヤの預言は、これからも常に新たに出来事となって行かねばならないのです。

ハレルヤ、アーメン。

9月17日 年間第24主日

イザ 50:5～9a ヤコ 2:14～18 マコ 8:27～35

1. マコ

v.29 「そこでイエスがお尋ねになった。“それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。” ペトロが答えた。“あなたは、メシアです。”」

これはペトロ個人の信仰ではありません。彼は 12 使徒を代表して告白しているというのが福音書の理解であり、そして歴史の教会とは、それを自らの信仰告白として承認した人々の群であります。

使徒ペトロはイエスが捕らえられるほんのわずか前に、「たとえ御一緒に死なねばならなくても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」と、その信仰の決意を強調しました(マコ 14:31)。その彼が、まだ何の危機も迫っていないときにイエスが御自分の受難を予告されるのを聞いて、とんでもないことだと反論したという過去の失敗談を、後になって語りました。それは彼の宣教を聞いて信じる信徒たちに、“キリストを信じる信仰” を正しく理解させたかったからに違いありません。使徒たちはみな、復活のキリストに出会って初めて、信仰とは何であるかを本当に理解した、という体験を持っていました。

v.34 「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」

多くの人々がこれまで、自分の十字架を負うとは、人間が自らの信仰によってもう一人のキリストになることだと考えて来ました。そしてそう考えることによって、相対的にキリスト御自身の受難と復活の重要性が軽く見られ、たかだか“偉大な過去の手本” のようなものとして美しく語られたことを、私たちは十分に知っています。あえて言えば、“現代のキリスト者が負う十字架が、かつてのキリストの十字架を最早不要のものとする” という結果が、通俗的なキリスト者の信仰理解の実状であったと言えるのです。

しかし、使徒たちが宣教したのは、人が自らの信仰によってキリストのようになることではありませんでした。「わたしたち(使徒たち)はこう考えます。すなわち、一人の方がすべての人のために死んでくださった以上、すべての人も死んだことになります。その一人の方はすべての人のために死んでくださった。その目的は、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きることです。」(II コリ 5:14-15) キリストのために生きることは、キリストのようになることとは違うのです。

2. イザ

このイザヤ書のテキストは、“僕の歌” の三番目のもので、初代教会はこれを、主イエスが私たちの罪のために死んだこと(I コリ 15:3)の預言として理解しました。

しかし、もし私たちがこれを手本にして、“自分の信仰” なるものを主張することに利用しようとする、そのときに陥る罪の姿が エレ 5:3 に描かれています。「(神が)彼らを打たれても、彼らは痛みを覚え、彼

らを打ちのめされても、彼らは懲らしめを受け入れず、その顔を岩よりも硬くして、(神に)立ち帰ることを拒みました。」

実に「私たちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです。」(エフェ1:7) 「この私には、私たちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。」(ガラ6:14)

3. ヤコ

v.17 「行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです。」

“信仰”とは、精神的なもの、個人の心の中の事柄であるように考える人々が一方にあり、その対極に平和運動や社会活動という“行動”にこれを置き換えて理解する人々が存在します。後者の人々にとっては、ヤコブ書は好都合な弁護を提供してくれるように見えるかも知れません。“人が救われるのは信仰によるのか、それとも行いによるのか”という図式での、プロテスタント信者によるカトリックに対する不毛の論争が行われて来たことを、私たちは知っています。

第二バチカン公会議後の典礼刷新は、ミサこそが“信仰”が“行い”となって表現される最も中心的な場であることを明確にしました。「典礼は教会の活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る泉である」と、典礼憲章(10)は述べています。それは、使徒たちが聖伝と聖書を通して証言している本来の“信仰”への回帰であったということ、私たちは十分に理解する必要があります。共にミサをささげる共同体の中での兄弟姉妹への援助と協力という、一人一人の信者にとって最も身近な仲間である主の羊への“愛の行動”が、私たちの信仰にとっていかに中心的な課題であるかを、新約聖書は繰り返し教えています。「聖霊は、神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会の世話をさせるために」(使20:28)教導職も信徒も心を一つにすることを、切に求めておられるのです。

ハレルヤ、アーメン。

9月24日 年間第25主日

知 2:12,17~20 ヤコ 3:16~4:3 マコ 9:30~37

1. マコ

イエスの弟子たちがキリストとその福音を正しく理解したのは、復活の主にお会いしてから後であったというのが、新約聖書が伝える一致した証言です。言うまでもなくその証言は、使徒たち自身が語ったものであります。ですからその使徒たちの証言は、私たちが福音書に描かれているイエスと弟子たちの物語りを正しく理解するための前提でなければなりません。

vv.30-31 「しかし、イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。それは弟子たちに、“人の子は、人々の手に引き渡され、殺される。殺されて三日の後に復活する” と言っておられたからである。」

主は、この世の人々と弟子たちとを区別して、この世の人々には理解出来なくても、弟子たちにはキリストの福音を正しく理解することを期待されました。しかしこの当時にはまだ弟子たちは、それが全く理解出来ませんでした。なぜ使徒たちはこのような過去の体験を繰り返し語ったのでしょうか。それはキリストの福音は、復活の主との再会、そして復活の主が語ってくださった教えがあってこそ、初めて理解出来るものだということを、代々の教会に知らせるためでありました(マコ 9:9-10、使 1:3、ガラ 1:12 参照)。

その後続く“いちばん偉い者”の物語りの中に、子供を受け入れる話があって、これがキリスト教の幼児教育への責務を語る論拠に用いられて来たことは、よく知られています。しかし、それがこの物語りの本来の意図であるかどうかには、かなり疑問があるのです。

2.

イエス御自身による死と復活の予告は、福音書の中に三回記録されているのですが、その最初の物語りについては先週学びました。そしてそこで使徒たちは、人が自らの信仰によってキリストのようになることを宣教したのではなかったことを見ました。第二回目の物語りとそれに続く解説が今朝のテキストであり、ほぼ同じ趣旨の内容で第三回目の物語りも記録されています(マコ 10:32-45)。この第二回目と第三回目の物語りでも、使徒たちが伝えようとしたのは、人が自らの信仰によってキリストのようになるという教えではなかったように思われます。

イエスは、だれがいちばん偉いかを議論するような社会を否定したり拒否したではありませんでした。むしろ、偉い人たちが権力を振るっているという現実を承認されました(マコ 10:42)。使徒たちが“すべての人に仕える者になりなさい(v.35)”、“すべての人の僕になりなさい(10:44)”というイエスの言葉を伝えた目的はただ一つ、僕の身分になって(フィリ 2:7)御自身を罪を償う供え物となさった(ロマ 3:25)キリストを、信仰によって受け入れることを宣教するためでありました。ですから第三回目の物語りを締めくくるイエスの言葉は、重要です。「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自

分の命を献げるために来たのである。」(10:45)

このキリストが死んで、さらに復活して神の右の座に着き、今や信じる者たちのために執り成してくださっていると、使徒たちは聖書を通して証言し続けているのです。

3. 知

使徒たちは、主イエスが人々の手に“引き渡された”という言葉を用いてその死を証言しました(マコ 9:31, 10:33、使 2:23、ロマ 8:32)。それは、主の死と復活が神の御計画であったということを明確にするためでした(使 2:23)。知恵の書は元来、神を信じない者の考え(知 2:21)を非難して、この歌を書きました。しかし、その罪人たちの手に自ら進んで(マコ 14:36)引き渡された(マコ 14:41)方が、外ならぬ主イエス・キリストであったことを、私たちは今朝の朗読配分を通して聞いているのです。“すべての人に仕える者”、“すべての人の僕”になったのは、主キリスト御自身でありました。

主イエスは、「十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが罪に対して死んで、義によって生きようになるためです。」(1ペト 2:24) このキリストとその福音に聞くこと、そのことこそが、21世紀のキリスト者に求められている最大の課題でなくてなんでしょう。それは使徒たちの宣教を伝える教会の遺産、聖伝と聖書を通して、すべての人々に提供されているものです。

ハレルヤ、アーメン。